大好きのその一言

嶺羅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
大好きのその一言

【Ｎコード】
Ｎ８９３７Ｈ

【作者名】
嶺羅

【あらすじ】
蘭の誕生日。蘭は新一の言葉を待っていた。でも…？※蘭のキャラ壊れ気味かもしれません；；

照れくさい、なんて言うけれど、
こんな簡単な言葉はないと思うわよ？
だって貴方は、それを上回る照れくさいセリフを言ってるんだもの。
決して簡単な言葉ではないと思うの。
でもね、新一。

一度だけ。

一度だけでいいから、言って欲しいの。

「好きだ」の一言を。

****
****

「新一！遅刻するわよ！」

「わぁってるよ！」

「本当かしら。」

いつもの朝だった。
それは、工藤邸での出来事。
当たり前のように寝坊する新一。それをせかす私。
いつもと変わらないのよ、日課なの。
だけど私は違った。ひとつだけ、気がかりなこと。
それだけ、ただそれだけだったけど…

私たちは付き合ってる、でもね、
今日は私の誕生日なんだ。
だから今日くらいは私に迷惑をかけないで普通に起きて、普通に登校して、
好きだって、言ってほしかった。

せめて、一番に「誕生日オメデトウ」って、言ってほしかったんだ。

だけど新一は全然わかってない。
私の気持ち、わかってないよ…

新一が言ったんじゃない。

「世界で一番は、蘭だけ」って。

あの言葉は嬉しかったけど、正直言うとよくサラッと言えるね、なんて
逆にこっちが恥ずかしくてたまらなかった。

でも、まだ好きって言って貰ったことはない。

新一は今の私の気持ち知ったら、欲求不満だって笑う？
だって、新一の口から聞きたいの。愛情が足りないなんて思ってない。
でも、ただその一言を言ってほしい。

ただ、それだけ。

プレゼントとか、そんなのはいらない。
新一から好きって言って貰えたら、ただそれだけで、嬉しいよ。

「蘭、用意できたから行こうぜ」

「う、うん…」

頭の中がまだグチャグチャだ。
私ってこんなに欲望にあふれた女だったっけ…？

ハッとした私は首を横に振った。
自分でそう思ったことを悔やんだ。
欲望なんて…なんかいやらしいヒビキ。それがたまらなく嫌だった。

「そういえばさ、蘭」

「なあに？新一」

「今日、米花シティビルに行かねえか？」

米花シティビル…
あまり良い思い出はないな…。

新一が、またいなくなったあのビル。
あのビルを思い出すと、もしかしたらまたいなくなるんじゃないかって、不安になる。

正直戸惑ったけど、せっかく新一が誘ってくれたんだから、行ってみようと思った。
私が行くと告げると、新一は「迎えに行くから」と言った。
――新一が来るまで私、準備を楽しもうかな。

米花シティビルは、あの頃と変わらずきれいな店内だった。
新一は前来た時にも座った、あの1組のカップルがプロポーズを受けたという席へ付く。
私も後から席に着いた。
外の夜景はあまりにも美しくて、思わず声が出た。

「わぁ、見てみて新一。夜景がとっても綺麗・・・。」

「おう、そうだな・・・。」

予想外のそっけない返事に気づいた私は、新一の顔を覗き込む。
新一は、緊張しているようだった。
今さら緊張なんかすること無いのに。

店内のお客さんは、みんなカップルばかり。そのせいか、みんな新一に振り向かない。

かつて高校生探偵で有名だった新一。今でも数々の優秀な功績をあげている。
そんな有名な新一に、どうしてみんな振り向かないのだろう？
周りを見ていた私に、新一が声をかけた。

「あのさ・・・蘭。」

「ん？なに、新一。」

てっきり私は、「何周り気にしてんだよ？」なんて言葉が返ってくるのかと思ってた。
しかし予想は外れ、思いがけない一言が帰って来た。

「俺と、結婚して下さい。」

私は思いがけない言葉にきょとんとした。

そして、さっきまで見向きもしなかった周りのお客さんは、一気にざわめき出した。
新一は顔を真っ赤にしながらも私の方を見つめる。
私はハッとし、今自分におかれる状況に、みるみる照れ出す。

あぁ・・・今日は最高の日になったよ、新一。
好きって言葉だけで、私は十分幸せになれたのに、まさかプロポーズしてくれるなんて。
でも、また好きって言ってくれなかったね。でも、そんな事はどうでもよくなった。

「・・・うん。」

私はそれだけを言って、俯いた。
今私きっと、新一より顔が真っ赤。

「まじで?!」

そう叫ぶ新一。もう・・・恥ずかしいよ・・・。

すると周りから、拍手が響いて来た。
店内は拍手で埋め尽くされた。私たちを祝福してくれている、お客さんの拍手で・・・

そして拍手をしながら私たちに近づいてきたのは、前私にここでプロポーズがあったと
教えてくれた店員さんだった。

「良かったね！」

店員さんは耳元で私に言った。そして大きなケーキを持って来てくれた。
新一の方を見ると、にっこりほほ笑んだ。

ケーキのプレートには、「蘭誕生日オメデトウ」の文字が。

「新一・・・これ・・・。」

「今日、誕生日だろ。だから、ケーキ。」

知らぬ間に涙があふれた。
それは悲しみの涙なんかじゃなく、嬉しさの、涙。

「ありがとう、新一・・・。私、今日は最高の誕生日だよ。」

新一は照れながらも、私に微笑みかけてくれた。
私も、それに答えるかのように新一に微笑んだ。

――――二年後――――

「新一、お皿持ってきてくれる？」

「あぁ、分かった。」

結婚して3ヶ月が過ぎた。
私たちは充実した毎日を過ごしている。

そして、『あの言葉』は――――

「蘭、これでいいか？」

「あ、うん！ありがと！そこに置いといてくれる？」

「あぁ。」

今日は私の２０回目の誕生日だった。
二人でケーキを食べる。
このひとときが何より好きだった。

「蘭。」

「ん？」

「好きだ。」

クスッ

思わず笑みがこぼれる。

「何を今さら・・・そんなの分かってるよ。ありがと。」

「なんか言いたくなったから・・・。」

突然で驚くこともあるけど、言ってくれるようになった。
あの、プロポーズをしてくれたあの日から・・・

「私も、新一のこと好きよ。」

大好きよ、ずっと、ずーーっと。

「大好きだぜ、蘭。」

大好きな、声

ずっとずっと、聞いていたい。

私もよ、新一。

（後書き）

短編は書くの苦手ですが…
好きです、短編笑
書くのが楽しいｗｗｗ
今回の蘭、ちょっと積極的？でしたね；
評価など頂けたら幸いです。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8937h/

大好きのその一言

2010年12月19日14時41分発行